（多田より注記：メディア・プロデューサーの井坂氏のもうひとつの顔は、詩人である。すでに数多くの詩集を世に問うている。その中からいくつかの作品をご寄稿いただいた。）

井坂康志詩集選

ちいさな死を友として

井坂康志

古井戸

つるべみたいに
冷え固まった自我を
こんなふうに

言葉が古井戸から
引き上げてくれる

ついさっきまで
地中を流れていた
清らかな水みたいに

水が生まれてきた霊でなかったら
いったい何なのだろう

言葉が魂をすくいとる柄杓でなかったら
いったい何なのだろう

梨の香のする里にいこうよ

茜の落日を背に
いこうよ
梨の香のする里へ

ぼくらの魂の憩う
あの場所へ

オレンジ輝く小川に沿って
小道をたどれば

丘の上
下草の湿りを
足裏に感じ

いこうよ
梨の香のする里へ
茜の落日を背に受けて

雲はすみれにたなびいて
ぼくらの魂の憩う
あの場所へ

川辺

しめやかに
さても涼しき
永野川
血を吐く夕日を背に受けて
土手に
こぐペダル
ぼくらの影が
貧しい民家のとたんの塀に
黒く鋭く
映ってる

渡良瀬——きみは夕日を見ていた

きみは夕日を見ていた
新三国橋の彼方
冷たいサバンナの地平に
溶けゆく真っ黒なチーズ

きみは夕日を見ていた
利根川と渡良瀬川の
ひとつになる無音の場所で
枯れた冬草いっぱいに

濃い影ばかり
口を変にとがらせて

きみは夕日を見ていた
筑波の峯は
うすくあかく田野の果てに
あの上州の山並み
日光の連山

きみは夕日を見ていた
制服の襟を立てて
頬を切る風のなか
自転車にもたれて

きみは夕日を見ていた
地の果ての
真っ黒な夕日が
潤む瞳の真ん中の
新三国橋の彼方に
ゆっくりと溶けていく

おやすみ

凍る星々の冴え冴えと
黒い大地を広く照らし
この伸びる影に
指先を結び合わせて

あの湿原のくすの巨木の下で
そうであったかもしれない日々の
そうであったかもしれない物語を
いつまでも語り続けよう

生温かい風の吹きすさび
僕らが遠い雲だった時代を
月だった頃の思い出を
山奥の鉱物だった日々の
呪文を今唱えよう

永遠にいたる秘密の呪文を

おやすみ

（ひとつ詩ができるということは）

ひとつ詩ができるということは
ぶかっこうでもぶざまでも
野原のはずれに小屋を建てたのと同じこと
蕗や茅や枯れ枝で組まれた小屋も
ことりの雨宿りくらいにならなるだろう

硫黄

癒されてしまったら
何も書けなくなる
だから
打ちつけよ
あの重たいハンマーと鉄床との間で
マッチを擦れ
だから
堅い野生の火花のように
脳漿を散らし
躊躇なく
逡巡もなく
断固たる偏見とともに
マッチを擦れ
冷えた自我を灼熱せよ

黄金の酒蔵――死者たちを讃える歌

軒下すれすれに走るせせらぎ
いくつもの起伏とカーブを抜けて
銀のますのように

まだらなす黄金のたまりを安らいで
あの酒蔵に筋をひいて流れ落ちる

数えきれない世代の間
名づけられることなき琥珀の酵母

言葉と精神のウィスキーを醸し上げる
飴色の小瓶につがれ
ディオニソスの饗宴の
テーブルに載るのを待つ

時代は酒蔵
人は酒
食道をせせらぎが流れ
臓腑に落ちていき

虹のような永遠を見せ
死者たちが語り始める

新しきものはない
そのひとしずくが永遠と同通し
太古の幻影を見せ

死者たちとともに
輪舞する

蔵人よ
君の体と心と霊をめぐる
酵母のどこからきたかを
君は知らない

蔵人よ
君の蔵で醸せ
夕景の黄金の奔流

この酒蔵を
命を懸けて守れ

（いったいこの世界は）

いったいこの世界は
無数の小さな英雄を
どれほど破滅させてきたろう

いったいこの世界は
名もなき高貴な魂を
どれほど損なってきたろう

真夜中夢に起こされて
天井のしみと
わが魂が
しずかに語りかけてくる

ブルーズ――ちいさな死を友として

新宿の空
今このギターをつまびこう
始発まではまだ間があるだろう
酔客の姿も絶えて
前髪の間を
真昼のような月が昇るだろう
風に切れ切れのアルペジオ
よれた煙草に火をともし
革ジャンパーの酢えた匂い
今夜最後のブルーズを
ちいさな死を友として

アダム・チェルニアコフに捧げる詩

あなたに会いにやってきた

この極寒の
ワルシャワ外れのユダヤ人墓地に
一人佇む

人からも
ユダヤ人さえからも
やがて世界からも知られず
一人執務室で毒を仰いだ
孤独な男

チェルニアコフ
あなたはワルシャワ・ゲットーの
ユダヤ人協議会の議長で
元は電気技師

誰の目にも政治とはほど遠い
だからナチスの連中も
あなたを無害と思ったにちがいない

チェルニアコフ
息子ほどのナチスの将校に
頤使され
時に重い軍靴でこづかれて
あなたの生活で
世界はすでに十分過ぎるほど
失われ尽くしていたのだ

やがてあの移送がはじまって
パヴィアク刑務所に
コルチャクの子供たちが集められ
ウムラークシュプラッツから引き込まれた鉄道で
一人残らず
トレブリンカに消えたのを知ったとき

あなたは人生で初めて
内臓液の、脳漿の一滴まで
搾り尽くして
泣いたのだ

涙があなたの丸眼鏡の縁にたまり
絶望の嗚咽が執務室にこだまする

私は願わずにはいられない

夜明けの窓に一つでも
金の星が
ちいさく瞬いたことを

少なくとも彼が
絶望の孤独の中で
死を選んだのではなかったと
そう思えるから

もうじき日は暮れる
ワルシャワの街が夜気に包まれる

もう零下だ
ユダヤ人墓地に人影はない

失われた世紀の英雄
アダム・チェルニアコフの墓碑に
ユダヤ人の古い慣例にならい
この小さな石を置いていこう